

論壇

ベートーベン生誕250年 楽曲に込めた生きる力

田幸正邦



今年がベートーベン生誕250年を記念して多くの演奏会がある。彼が作品にこめた人類へのメッセージを紹介したい。

ベートーベンが難聴の苦悩を「ピアノソナタ第8番」に悲憤に秘め(1799年)、それから脱却する強い決意を「第3番交響曲英雄」に表明した(1804年)。また、恋心を「熱情ソナタ」に(04年)、恋人の美を交響曲第4番(06年)とバイオリン協奏曲(同年)につづらせた。特に、後者に幸福の絶頂(4連打)を表象する。

ところが、運命交響曲(08年)に失恋の衝撃を大爆発させ、田園交響曲(同年)に癒やした。ベートーベンは失恋の直後、自殺の衝動(07年秋)に駆られた情景を、後に「合唱幻想曲」(08年12月)につづる。神(金管)と天使(木管)が自殺を思い留まらせ、しがらみを浄化してピアノ音楽の道をまっすぐ進む決意と生きる希望を多くの友人(ソロと合唱)と歌う。3曲を同日に初演(08年12月22日)、尊厳を顕示した。この曲が第9交響曲の基礎になる。

その3年後、ヨゼフィーネが再婚(10年)した衝撃から、「第7番交響曲」が産まれた。彼は狂人の如く

徘徊するが「それでも彼女を愛している(2連打)」と結ぶ。

2人はマラハで偶然再会して愛し合う(12年7月3日)。ベートーベンは余韻の中で、交響曲第8番の構想を練ると同時に、宛名のない「不滅の恋人」への手紙を記して私たちに難題を残した。翌年4月にヨゼフィーネが女児を生んだ。彼は長い低迷期に入る。一方の彼女は、離婚して次第に心を閉ざすようになる。

「第32番ソナタ最終楽章」に、亡くなった彼女と夢の中でワルツ、ホルカ、強烈なシンコペーションの曲(シヤズの原型)を踊った後、夢から覚めて現実につれ、再会を誓い、ピアノソナタのジャンルを完結する(22年)。

ベートーベンはヨゼフィーネと再会して愛を語り合う(「第9交響曲第3楽章」24年)。そして、夢のまた夢(来世)で対話しながら留まらざるが、彼女の絶叫(トランペット)により覚醒する(第2バイオリン)。ベートーベンの蘇生を確認したヨゼフィーネが、天女の如く舞い上がる情景(第1バイオリン)が描かれている。私はこの楽章を「音楽芸術の至宝」と高く評価する。

ベートーベンは第4楽章に「人類愛の賛歌」を歌い、私たちが未来永劫繁栄することを希望する。

(沖縄市、沖縄ベートーベン協会会長、琉球大学名誉教授、72歳)